SERVICE LEARNING CENTER
RITSUMEIKAN UNIVERSITY

立命館大学「減災 × 学びプロジェクト」
～全学教養科目「シチズンシップ・スタディーズⅠ」～

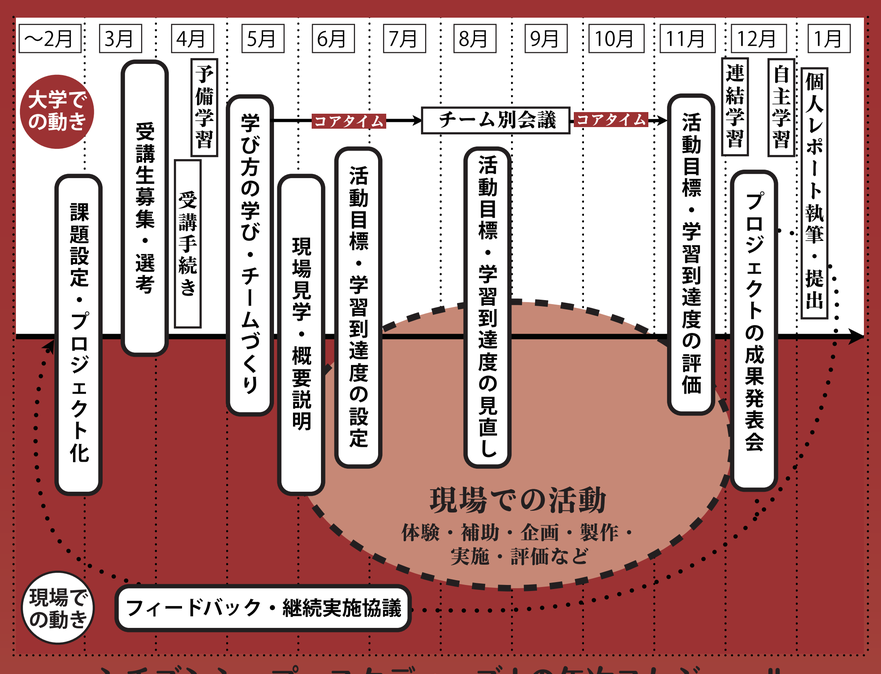
キーワード 定点観測［あれは（私に／私たちにとって）何だったのか］ サービスラーニング［他者との関わりを通じて学ぶ］ 追体験［未災者が未来の未災者へ被災経験を伝承していく契機］

立命館大学では 2004 年にボランティアセンターを設置し、地域活性化のためのボランティア活動を組み込んだ学習プログラムを全学教養科目として展開してきています。2008 年度にサービスラーニングセンターとして組織変更が行われてからは、現代的な課題との関わりを通して民主主義と市民性をはぐくむプロジェクトを設けるようになりました。

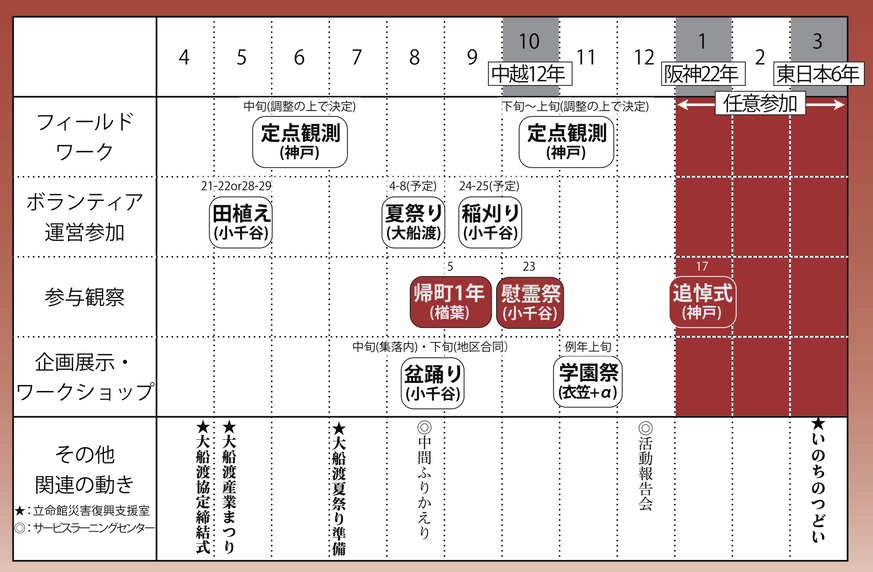
東日本大震災を経験した後、2012 年に設置されたのが「減災 × 学びプロジェクト」（減災 P）です。災害の悲しみは数字に表れるものではなく、亡くなった方に対して数え切れない遺族への、さらには原子力災害によって＜わがまち＞に戻ることができない方々への想像力を巡らせることが大切だと捉え、2011 年 4 月 21 日設置の立命館災害復興支援室との連携のもと、いわゆる PBL 型の震災学習プログラムが構想・設計されました。

阪神・淡路大震災は「ボランティア元年」と言われました。それから 16 年後の東日本大震災のあいだ、新潟県中越地震など、全国各地で災害が起こりました。そして支援の現場に立った人々が被害を語り継ぎ、つながりあい、その後新たな被災地に駆けつけることで、日常・非日常の双方でボランティアの文化が耕されていきました。そこで減災 P では、神戸・新潟そして東北の「今」に携わりながら、仮に自らが被災者となった時の受援力向上を目指します。

メンバーは毎年 3 月末に募集され、応募理由をもとにした選考を経て、5 月から徐々に活動を展開します。事前学習や中間ふりかえりや事後学習など、教員による授業も行われますが、大学と現場とを往復し、実践の言語化のもとで深い思考を重ねることが求められます。



シチズンシップ・スタディーズⅠの年次スケジュール



減災 P の年次スケジュール（2016 年度）

サービスラーニングという学び方・減災 P 以外のプログラムなどについては、立命館大学サービスラーニングセンターのホームページをご参照ください。

http://www.ritsumei.ac.jp/slc/

減災Pと神戸との関わり

2012年から、年度当初に人と防災未来センターを見学。2013年度に資料室スタッフから提案。

「大仁さんという個人の活動を再評価し、公の財産として次につなげるためにも、大仁さんが撮影された場所の現在を新たに撮影し、展示したいと考えています」（高森順子／2013年5月14日 1:12AM）

↑故人が遺した写真集を発見・市井の記録に着目・学生の学びに

大仁節子(2009)
『翔け神戸：阪神・淡路大震災の定点撮影』
友月書房【2,000部・自費出版・A5版168ページ】

- □阪神・淡路大震災当時、神戸市東灘区森南町在住
- □震災時の写真とその後の復興の様子を定点撮影
- □オールカラーで123セット(246枚)を掲載し無償配付

定点観測開始 →

各種報道も →

【例】朝日新聞 2013／12／25「撮る 継ぐ 19年」

神戸での学びと他地域からの学び

2013年度、人と防災未来センターで企画展が開催。写真パネルは仙台・大阪でも展示。翌年度から撮影は継続実施。

東北の復興を考える上で大規模災害から復興を遂げた神戸に学ぶと共に、神戸以外の復興過程からも学ぶため、都市型ではない災害として中越に着目。東北の被災3県でも福島が置かれた状況に改めて関心を向けて活動。また、熊本でも支援。

減災 P による各地域への関わり

災害	神戸	中越	東日本大震災		熊本
			岩手	福島	
地域	東灘	小千谷	大船渡	楢葉	西原
発災から	21年	12年	5年6ヶ月		6ヶ月
関わり	定点観測	田植え～稲刈り	夏祭り運営補助	人生史の聞き綴り	農業復興支援
活動風景					
現地協力	研究者	住民団体	住民団体	まちづくり会社	ボランティアセンター
減災Pの関わり	2013～	2012～	2012～	2015～	2016

各地地域からの学びと成長・減災への視点

	支援を通した学びと成長	減災への視点
神戸	あまり触れらなかった点も観ると過程に関心が向く	土地勘のある人が1人でもいると違う
中越	地域の担い手集団は混在し活動の背景への理解が重要	名前で呼び合う関係がより関係を深める
大船渡	震災前の出来事の再開は地区の誇りを取り戻すこと	年一度のお祭が地域の魅力を掘り起こす
楢葉	誰かに来てもらえることが忘れられていない実感に	知らないことよりも知ろうとしないのが問題
熊本	被災された方々のお人柄が支援の継続度を左右する	現金収入を絶えぬよう家より作業場が大事な時も

今後の継続・発展への視点

まずは大仁さんによる1枚目・2枚目に続く「3枚目」の全撮影へ。そして伝える活動のモードに。

撮影の意味と地点確認

なぜ当時、その方法だったのかの理解が大切。

役割分担しながら撮影

人によって慣れ・不慣れがあり「キャラ」設定を

GPSで撮影地点を記録

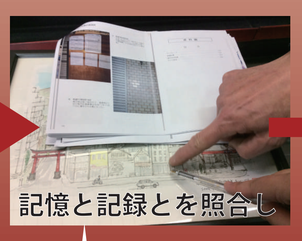
効率と確実さのために！(同じ苦労も学びかも？)

大仁さんの身長を想定

デジタル撮影ですが可能な限り当時の気持ちに…

当時の街をお店に尋ね

変わるものもあれば変わらないものもあります


記憶と記録とを照合し

観るだけでわからないことが尋ねてわかることも

生まれる前の災害から

「未災者」という立場はまさに自分たちのこと…

未来への伝言を紡ぐ

地点の3つの時代を比べたフォトブック等を…